

OCARINA通信

The OCU Advanced Research Institute for Natural Science and Technology



—特別企画—

核となり得るプロジェクトは産みだせるか？
10年を経て、再び立つスタートライン

若手研究者たちの意欲を引き出し、
可能性を広げるための組織づくりへ
新たな枠組みで、より大きなテーマに取り組む、
複合先端研究機構の未来

—複合先端研究機構の沿革—

CHRONICLE of OCARINA

木下 佑一氏
デザイン・イラスト

VOL.9
2020.3

■特別企画

若手研究者たちの意欲を引き出し、可能性を広げるための組織づくりへ。新たな枠組みで、より大きなテーマに取り組む、複合先端研究機構の未来。



全人類にかかる研究課題に取り組み、人材育成や社会還元を目指してきた複合先端研究機構が、10年をひとつの節目として新たな組織に生まれ変わります。「先端」「複合」「国際性」「若手育成」といったキーワードで、この10年を振り返ります。さらに、プロジェクト研究の可能性、複合先端研究機構のこれからについて、活発な意見交換がおこなわれました。

1

プロジェクト制度が先端性を加速させた。

宮野機構長／ご承知のように、複合先端研究機構が来年度から新しく模様替えをいたします。

学長の諮問機関である教育研究戦略機構会議のもとに、昨年には複合先端研究機構のあり方についての提言がまとめられています。それによって、複合先端研究機構は来年度からプロジェクト研究を推進する専任教員をもたない組織として運営される運びとなりました。

そこでまずは、複合先端研究機構の「先端」という言葉ですね。複合先端研究機構にあるいくつかの理念のなかで、先端研究を追い求めてきた。その方向性が果たして叶ったのかどうか。2010年から専任教授を勤めておられます神谷先生いかがでしょうか。

神谷特別招へい教授・名誉教授／ご質問にお答えする前に、複合先端研究機構の理念の中身から話を始めさせていただきます。これまで複合先端研究機構では、エネルギーや環境、防災などの都市問題に着目し、それらの解決方法を大阪市民に向けて提案することも念頭において、文字通り「複合先端」をキーワードにして研究を進めてきました。今この10年を振り返ると、2014年度までの前半と2015年度以降の後半に分けられると思います。その前半は光合成・人工光合成研究を中心的なプロジェクトとして進められました。

当初、大きなプロジェクトを3つ並行して走らせる、というアイデアがあったのですが、2014年までは光合成・人工光合成研究は走ったけれど、それと並ぶような他の大きなプロジェクトが立ち上がらなかった。2015年には、新たな研究スペースが拡充されたので、大きな外部予算を獲得している研究者からプロジェクトを集めて、それによって運用してきた、というのが2015年以降の状況です。

この10年を通して見た時に、ご質問の先端性についてはそれぞれの時期に狙いを定めてやってきた。規模の大小はあるかも知れませんが、複合先端研究機構のその名前に冠した「先端性」は、ある程度達成できたと思います。

天尾教授／私は2013年から複合先端研究機構の教員として、メインは人工光合成研究センターで仕事をしております。神谷先生がおっしゃられたように、2015年、ちょうど吉田先生が来られた時が転機で、新たな3つのプロジェクト、たとえば重川先生が入られている先端マテリアルのプロジェクトなどがスタートしました。2015年からは、また新たなものが生まれていく予感にあふれた4年間でしたね。

宮野機構長／天尾先生がおっしゃられたように、吉田先生は人工光合成研究のなかでも、より工学的な実践につながることを期待されて、本学に来られたと思います。そういった立場からでも結構ですし、おいでになった2015年からの推移を見られてきて、どういった感想をお持ちですか。

核となり得るプロジェクトは産みだせるか？ 10年を経て、再び立つスタートライン。



profile

大阪市立大学 特別招へい教授・名誉教授
複合先端研究機構

神谷 信夫 かみや のぶお

名古屋大学理学部卒業。同大学院博士課程修了。理学博士。高エネルギー物理学研究所放射光実験施設(PF) 客員研究員、理化学研究所研究員/副主任研究員、理化学研究所播磨研究所(Spring-8) 研究技術開発室室長を経て、2005年から本学大学院理学研究科教授、2010年から現職。2012年度朝日賞を受賞。



profile

大阪市立大学 複合先端研究機構 教授

天尾 豊 あまお ゆたか

1997年3月東京工業大学大学院生命理工学研究科博士課程修了 博士(工学)。同年4月(財)神奈川科学技術アカデミー研究員、1998年2月科学技術庁航空宇宙技術研究所研究員、2001年2月大分大学工学部講師、2002年4月同准教を経て2013年4月より現職。2015年4月より人工光合成研究センター所長。

吉田副機構長／実は私は、2015年に着任する数ヵ月前に2014年度の国際シンポジウムで発表の機会を得ました。その際、天然の光合成研究が本当に最先端をいっている印象を受けました。

私の着任と同じ時期に、いろいろな反応生成物をつくる工学的な研究者が、この大阪市立大学に集まって、どんどん増えてきました。そういう意味では、元々の天然の光合成研究の良い流れに、新しい流れが加わって、「先端」を目指しているのではないか、と思っています。

宮野機構長／重川先生は、この複合先端研究機構で研究を始められて5年間。プロジェクト研究のひとつの代表として、まさに「先端的」な研究だと思います。ご感想をいただけますか。

重川副機構長／私はプロジェクトの教員という立場で参加しておりますので、その立場から申し上げます。このプロジェクトという制度は、お金を払って、部屋を借りて、研究を加速する、という仕組みです。アメリカの大学にも類似の制度がありますね。

これは先端研究を限られた時間のなかで効率的に進める、という観点から見ると非常に良い仕組みだろうと考えています。ここ数年、副機構長という立場で関わらせていただいているのですが、ぜひ、この仕組みはなんらかの形で残していきたいと考えています。ただ、最近はプロジェクトが乱立気味でして、今後その交通整理が課題です。

複合を実現するために、若手研究者をサポートする。

宮野機構長／次に、「複合」というキーワードにうつって、意見交換したく思います。

この10年間の複合先端研究機構の流れを見ていくなかで、「複合性」についてどのくらい実現されてきているのか？

元々先端性のある研究がプロジェクトとして立ち上がっています。とんがった部分の研究を融合する難しさについては、ここ数年の座談会でも話題に上っていました。それをつなぐのは若手の方の存在ではないのか、という話も出てきておりました。

天尾教授／複合には特任の若手教員が准教授・講師・助教という形でおられます。

最近では若手の連携というのは、上手くいきつつあります。この2年、残念ながら採択まではされなかったのですが、特任教員だけでNEDOの若手のプロジェクトに応募いたしまして、今年度はヒアリングまでいっています。

若手の研究員にとっては、まずは自分の研究が一番大事ですので、他の研究にまで手を出すというのがなかなかできないんですが、最近は、真剣に自分たちの技術を持ち寄って提案書が書けてきています。目標に対して、何が必要か？というのが分かってくるなどトレーニングがなされてきたんですね。ヒアリングまで進めた、という経験は彼らにとっても非常に大きな財産になると思います。

個人だけではなく、チームを組めるスタートラインにつけた。「複合研究」「先端研究」への考え方の点で、若手研究者の育成が達成できつつある、と思います。

藤井准教授／私は、起こっている現場のすぐそばで、ひとつの部屋のなかで研究者たちの強烈なディスカッションが行なわれているのを見ていました。私も、もうちょっと若ければぜひ参加したいところですが、いまは、年齢制限も厳しいので(笑)。

狭い箱の中において、インタラクションのない方もいらっしゃるんですが、ここの教員たちはみなさん積極的です。人間的に交流があるうえで、ちゃんとサイエンスに結びつけ、自分がおもしろいと思っていることに取り組みされている。距離が近い、あるいは同じ箱・器の中に入る、というのも「複合の意義」ではないか、と改めて思います。

宮野機構長／まだ完全にすべての部分が「複合性」を十分にもっているとは言えないかもしれませんが、実際に、工学・理学という複数の分野の若手研究者がひとつのプロジェクトを作っている例もありますね。吉田先生、いかがですか。

吉田副機構長／若手の先生の複合というか融合は、最近素晴らしいと思います。不採択になってしまった後も、新しい共同研究や実験が始まっているのを、間近で見えています。

もうひとつは、審査の先生方に対してどういうアピールができるか？ということです。その点でも、年配の先生にプレゼンを見てもらうとか、他分野の先生に申請書を見てもらう、という流れも最近できて、横のつながりが生まれている。良い流れができつつあると思います。

宮野機構長／複合といっても、いわゆる工学・理学・生活科学といったディシプリンの複合だけではなく、天尾先生も言われたように、先端だからこそだと思いますが、ひとつの箱というか分野のとなりにも、全然言葉が通じなかったりする異分野があるということですよね。その融合もこの複合先端研究機構のなかでは実践できた、ということでしょうか？

■ 特別企画



profile

大阪市立大学複合先端研究機構 准教授

藤井 律子 ふじいりつこ

2001年3月関西学院大学 理学部博士課程 後期課程修了博士(理学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、関西学院大学理工学研究科・大阪市新産業創成センター・大阪市立大学理工学研究科にて博士研究員を歴任し、同大学複合先端研究機構 特任准教授を経て2013年4月から現職。2011年10月から2016年3月まで科学技術振興機構さきがけ研究者(兼任)。専門分野は生物物理化学、分光学。

天尾教授／そうです。だからこそ、ぜひ来年は、予算を取ってほしい。チャンスはすぐそこまで来ていますので。引き続き支援していきたいと思います。

より大きなテーマに挑む環境を整える。

宮野機構長／学内の競争的資金の重点研究でも、そういう芽が、いま、出始めてますよね。

神谷特別招へい教授・名誉教授／私に関わっている光合成・人工光合成でいうと、複合先端研究機構の狙いに沿って言えば、やはり「テーマが大きい方が良い」というのがひとつです。若手たちの研究をつなげて、どういう芽が出てくるか?肥やしをやって、光を当てて、水をやってというサポートを、まわりのシニアがアレンジしてあげると伸びていく可能性がある。

最初、私と橋本さんは人工光合成のことを頭の片隅には置きつつも、天然光合成の基礎的な仕事をしていただけです。それに人工光合成という旗が一緒についてくると、自分たちだけでゴソゴソやっているのでは話にならない。新しい人が入ってこられるような可能性を持たせる必要がありました。光合成・人工光合成のプロジェクト研究の流れの中では、いわゆる大学院構想に応募したこともあるのですが、残念ながらうまく行かず頓挫しています。しかし、そのようなことも視野に入れながら枠を拡げて、ある程度大きな研究のプロジェクトの枠を作ることができれば、と思っています。

宮野機構長／「テーマが大きい方が良い」というのは幅を拡げて、よりいろいろな分野、あるいはより多彩な若手研究者を迎え入れやすい素地を作っていく、ということですね。

神谷特別招へい教授・名誉教授／そうです。そういうオープンで、柔軟な環境で生きようプロジェクトや構想を立てておく。大きな枠がある、というのは「複合」と「先端」という2つのキーワードが両絡みになった時には、大事だと思います。

宮野機構長／これは複合先端研究機構ができた当初には当然考えていなかった部分でした。

かつては、テニュアトラックの特任教員を受け入れた実績もあります。その後、卓越研究員事業が開始され、外部から優秀な若手研究者を採用して、複合先端研究機構の枠組みの中でスペースを使っていたいただいています。重川先生が関わっておられる部分ですね。



profile

大阪市立大学 複合先端研究機構 教授
複合先端研究機構 副機構長

吉田 朋子 よしだともこ

京都大学大学院工学研究科にて博士課程を終了し、工学博士を取得。2017年、優れた研究活動を行う女性研究者に贈られる岡本賞を受賞。また同年、手掛ける研究が「笑顔あふれる知と健康のグローバル拠点」事業に採択。2015年より複合先端研究機構に籍を移し、光機能材料科学を研究。人工光合成研究センター副所長。

重川副機構長／最大のネックは土地です。本来の定員を超えて人を採用してしまうと、その人はどこで研究をするのか?という問題が生じます。土地の問題というのは、お金以上にシビアだと思っています。

しかし、先端研究員として、複合という形で受け入れていただくことによって、十分なスペースのある環境でスタートしていただける。これからは複合という立場や箱を使って、若手研究者の育成ができれば、この複合先端研究機構の存在意義、特に若手育成という点での存在意義はますます高まっています。

国際性豊かな、共同研究の機運は高まっている。

宮野機構長／もうひとつは設立からの理念として「国際性」というキーワードがありました。

年度末の国際シンポジウムでは、英語の発表をすることが義務付けられています。しかし、複合先端研究機構が求めてきた「国際性」というのは単にそれだけではなかったと思います。「国際性」というキーワードについて、いかがでしょうか?

神谷特別招へい教授・名誉教授／国際シンポジウムまで含めて、ワークショップはしっかりできてきたと思います。会議をやって、話をしてする事で「国際性」の根っこはできました。ただ、「国際性」を学生のメンバーまで含めて培えるのは、外国との共同研究だと思いますので、共同研究をもっと頑張る必要があったと思います。

天尾教授／求められる国際性の中で、人工光合成研究センターも文科省から拠点認定を受けて、今年の4月から運営委員に外国人の評価委員を入れるところからスタートしました。その中で、悲願であった本格的な国際共同研究をするための科研費が今回採択されました。これによって、国立台湾大学との人工光合成と二酸化炭素の共同研究を5年間にわたって科研費で開始できます。

この科研費の趣旨は、単に論文に共著として名前を載せるだけではなく、必ず若手メンバーを入れて、相手国に送りこんで滞在させ、実際に実験研究をするものです。5年間で論文も含めて、いかに共同研究の幅を上げられるか?このような本格的な国際共同研究が公的資金で進められるのは大きな成果です。

吉田副機構長／いま、若い先生方は日本で恵まれた環境にいらっしゃる場合も多いので、少し強制的にでも一度外に行ってもらい、と背中を押す。外国に行き、つながりをつくるべきだと思います。



profile

大阪市立大学 学長補佐
複合先端研究機構 機構長
宮野 道雄 みやの みちお

東京都立大学大学院工学研究科博士課程単位取得満期退学。工学博士。1985年大阪市立大学専任講師、その後、教授、生活科学研究科長・生活科学部長、理事兼副学長を経て、2016年から現職。専門分野は地域防災、住居安全工学。地震や風水害などの自然災害や住宅内外で発生する日常生活事故に関する研究を行い、安全で快適な生活環境の策定を目指してきた。



profile

大阪市立大学 大学院工学研究科 教授
複合先端研究機構 副機構長
重川 直輝 しげかわ なおてる

1984年3月東京大学理学部物理学科卒。1986年3月同理学系研究科物理学専攻修士課程修了。1986年4月から2011年9月までNTT厚木電気通信研究所(現先端集積デバイス研究所)にて化合物半導体ヘテロ接合デバイスの研究に従事。2011年10月より現職。博士(理学)。

す。論文を書くというのはデータのやり取りでできてしまいますので、それだけでは「国際化」にならないと思うんです。

藤井准教授／私は、インドネシアのマチェン大学光合成色素研究センターの所長さんからお声がけいただきまして、現在共同研究がスタートして、共著で論文も書いております。

それから、昨年度卒業して中国に就職したドクターコースの学生さんをキーパーソンにして、共同研究を始めることが現実的になってきております。天尾先生の台湾との共同研究もそうですが、日本とアジア地域の連携という方向性を検討しております。

宮野機構長／複合先端研究機構の光合成・人工光合成のプロジェクトと、それ以外では少し色合いが異なります。重川先生たちがやっていたようなプロジェクトの場合は、必ずしも国際性を追求するのが第一ではないと思っています。

一般的な国際性というよりは世の中の動き、SDGsのような観点、環境問題をはじめとする世界的な課題に、複合的な分野で取り組んでもらう研究プロジェクトを育てていく。そうした役割を意識しながら、現在新しい機構の規定を策定しているところです。

重川副機構長／引き続き、複合に残る立場で申しますと、今、宮野先生の言われたSDGsというのは非常に時機にかなったキーワードだと思います。

もうひとつ思い至ったのが「骨太」というキーワードです。我々、個々にプロジェクトを持っているわけですが、その中から人工光合成に匹敵するような「骨太」なプロジェクトを産みだすことが求められていると思います。

「骨太なプロジェクト」を産むカギは組織の強い連携にある。

宮野機構長／さきほど神谷先生が言われた「大きなテーマ」というのも一つのヒントだと思いますが、「骨太」という点について、神谷先生いかがですか。

神谷特別招へい教授・名誉教授／それは重なっている部分があると思います。大きなテーマと言ったのは、光合成・人工光合成ぐらゐのスパンをイメージしてプロジェクトをスタートさせれば、複合というものにたどり着ける、という意味です。

やはり組織だと思うんです。複合先端研究機構と強くタイアップするような組織を。URAセンターとペアになって動いて、URAの方

から提案してもらうようになれば可能性はふくらむような気がします。

重川副機構長／MITがそういう運営をしている、ということでしたね。

神谷特別招へい教授・名誉教授／そうでないと、最初に重川先生がおっしゃっていた単なるスペース提供で終わってしまうと思うんですよ。個別分散で終わってしまう。それでは「複合先端」に見合ったりザルトが出てこない気がします。新しく複合先端としてプロジェクト研究をもう一度動かす時に、枠組みや組織論を考えておく必要がある、と強く思います。

宮野機構長／今のお話をうかがいまして大変意を強くしました。実はURAにコミットしてもらうことを今考えています。まずURAが有機的に動いて、それで先生方の組織を作っていかなければなりません。

最後に何かこれだけは、ということがあればお願いします。

時代の要請にこたえる新しいプロジェクトを作っていく。

天尾教授／年表を見ますと、2007年から5年かかって人工光合成研究センターができていますね。私が期待したいのは2020年から5年後に、プロジェクトの中からまた新たな研究センターができれば、複合としては存在意義が出てくるのではないかと。時流に乗る、というのは研究者にとってはあまりいい言葉ではないですが、人工光合成研究センターの時には確かに時流があったように思います。

2025年ですと、ちょうど万博ですので、その時の流れのなかで重川先生の言われる骨太のプロジェクトから、新しい人工光合成と並ぶような研究センターができてくれれば、複合先端研究機構としての役割を、もう一度果たせるのではないかと、思っております。

宮野機構長／新しい大きなプロジェクトを作っていくもとなる、というのが本来の複合先端研究機構のあり方ですね。そういう組織を目指していきたいと思っています。

■ 複合先端研究機構の沿革 / CHRONICLE of OCARINA

2008

3月

「設立記念シンポジウム」☆¹ 開催

大阪市立大学 学術情報総合センター1F 文化交流室

4月

学内重点研究 (H20-H23) 開始

都市環境の再生に向けた戦略的新展開

12月

「国際ワークショップ」☆² 開催

大阪市立大学 文化交流センター ホール

太陽光エネルギーの有効利用に関するワークショップ



☆¹ 2008年3月10日
「設立記念シンポジウム」開催



☆² 2008年12月15日
「国際ワークショップ」開催

2009

2月

「ワークショップ」☆³ 開催

大阪市立大学 文化交流センター ホール

持続可能社会の実現に向けた次世代型エネルギー開発の現状と将来展望に関するワークショップ



☆³ 2009年2月23日
「ワークショップ」開催

2010

1月

「国際ワークショップ」☆⁴ 開催

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス 関西学院会館

3月

「第1回国際シンポジウム」☆⁵ 開催

淡路夢舞台国際会議場

欧米アジア各国から20名を含む150名が参加

4月

大阪市立大学複合先端研究機構規程の施行

10月

共通教育地区内 2号館に研究施設オープン

11月

「講演会」☆⁶ 開催

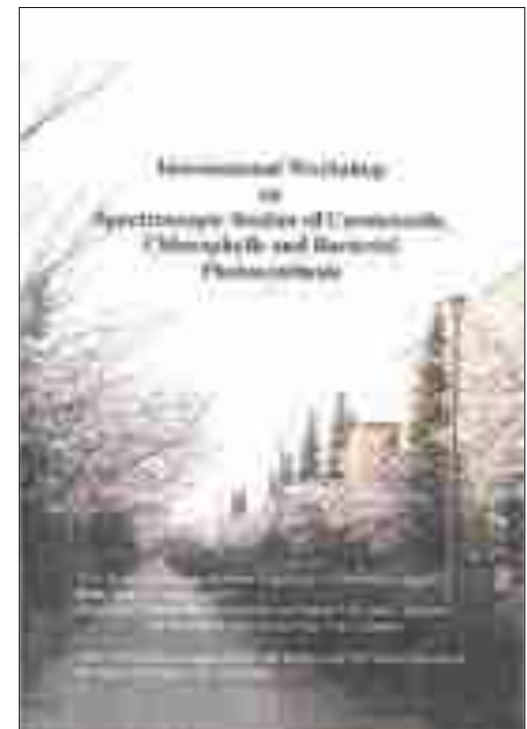
大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

2号館開所記念講演会

12月

「第2回国際シンポジウム」☆⁷ 開催

大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室



☆⁴ 2010年1月25日
「国際ワークショップ」開催



☆⁵ 2010年3月8-9日
「第1回国際シンポジウム」開催



☆⁶ 2010年11月18日 「講演会」開催

■ 複合先端研究機構の沿革 / CHRONICLE of OCARINA

2011

3月

「第3回国際シンポジウム」^{☆8} 開催
 大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

4月

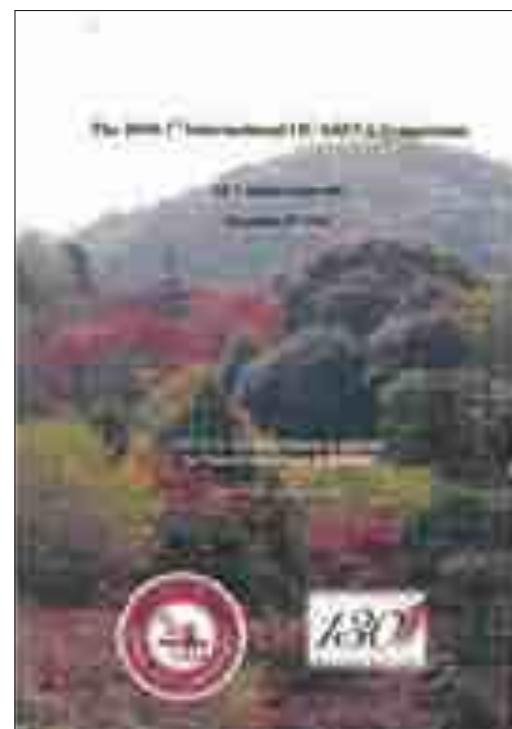
神谷信夫教授等の論文が Nature 誌電子版掲載

11月

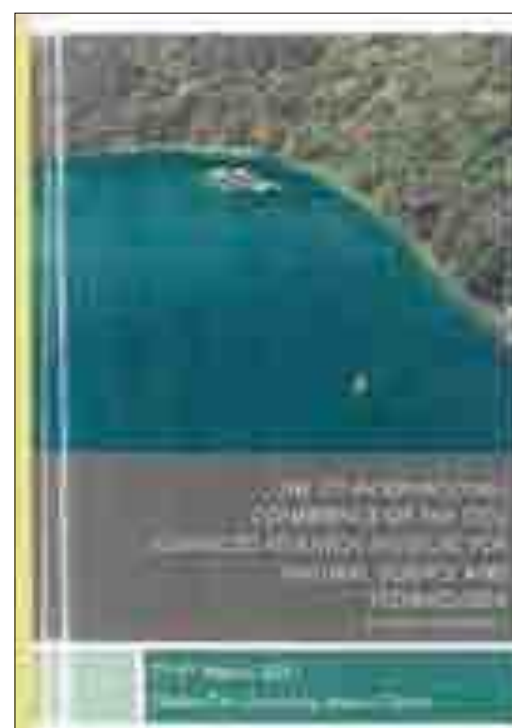
「講演会」^{☆9} 開催
 大阪市立大学 学術情報総合センター1F 文化交流室

12月

神谷信夫教授等の研究が米サイエンス誌による「ブレイクスルー・オブ・ザ・イヤー 2011」に選出。
 光合成タンパク質 PSII の主要構造の解明



☆7 2010年12月8日
 「第2回国際シンポジウム」開催



☆8 2011年3月7-9日
 「第3回国際シンポジウム」開催



☆9 2011年11月21日 「講演会」開催

2012

1月

**神谷信夫教授「光合成における水分解・酸素発生
 の分子機構の解明」で朝日賞受賞**

3月

「年次総会」^{☆10} 開催
 大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室
 平成23年度大阪市立大学複合先端研究機構年次総会

4月

学内重点研究（H24-H25）開始

人工光合成による Solar Fuels (太陽光燃料) 生成の実現

6月

人工光合成の実用化のための企業との共同研究の拠点として、人工光合成研究センターの着工

7月

理系学舎 C 棟竣工、一部入居

2013

3月

「第4回国際シンポジウム」^{☆11}開催

大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

人工光合成研究センターの竣工

4月

専任教員 2 名新採用

6月

人工光合成研究センター開所式

2014

2月

理系新学舎一部入居

テニユアトラック教員 1 名新採用

3月

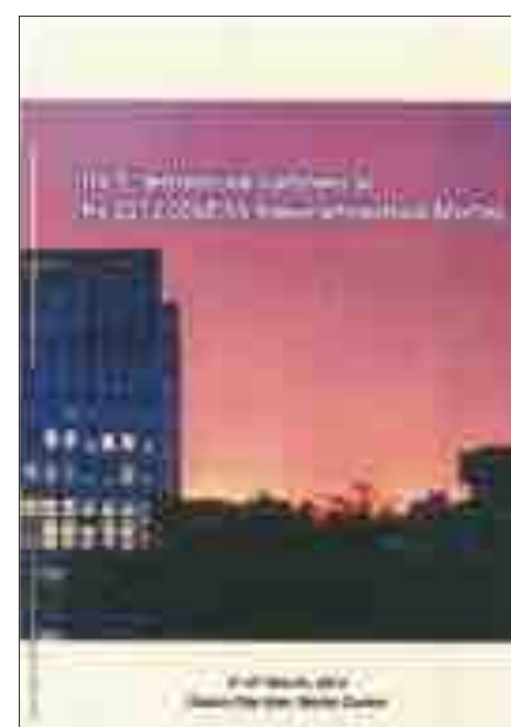
テニユアトラック教員 1 名新採用

「第5回国際シンポジウム」^{☆12}開催

大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室



☆10 2012年3月5-6日 「年次総会」開催

☆11 2013年3月4-6日
「第4回国際シンポジウム」開催☆12 2014年3月4-5日
「第5回国際シンポジウム」開催

■ 複合先端研究機構の沿革 / CHRONICLE of OCARINA

2015

4月

テニュアトラック教員 1 名新採用

学内重点研究 (H26-H27) 開始

再生可能エネルギー循環型創製都市構築への新戦略

3月

「第 6 回国際シンポジウム」☆13 開催

大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

4月

専任教員 1 名新採用

新規 3 プロジェクトがスタート

先端マテリアル、都市エネルギー防災、先端バイオ」プロジェクト

2016

3月

「第 7 回国際シンポジウム」☆14 開催

大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

4月

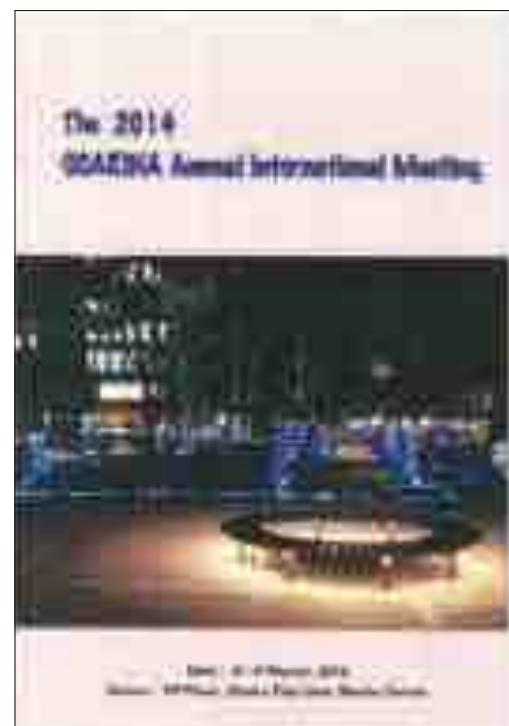
学内重点研究 (H28-H30) 開始

人工光合成研究拠点を活用した低炭素エネルギー循環型都市創造への戦略

人工光合成研究センターが文部科学省共同
利用・共同研究拠点に認定

新規に 1 プロジェクトがスタート

「バイオメディカル医療工学」プロジェクト



☆13 2015年3月4-5日
「第6回国際シンポジウム」開催



☆14 2016年3月17-18日
「第7回国際シンポジウム」開催



☆15 2017年3月7-8日
「第8回国際シンポジウム」開催

2017

3月

「第8回国際シンポジウム」☆¹⁵開催
大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

4月

新規に1プロジェクトがスタート
「バイオリソース」プロジェクト

8月

新規に1プロジェクトがスタート
「ナノマテリアル光制御」プロジェクト

2018

3月

「第9回国際シンポジウム」☆¹⁶開催
大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

2019

3月

「第10回国際シンポジウム」☆¹⁷開催
大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室

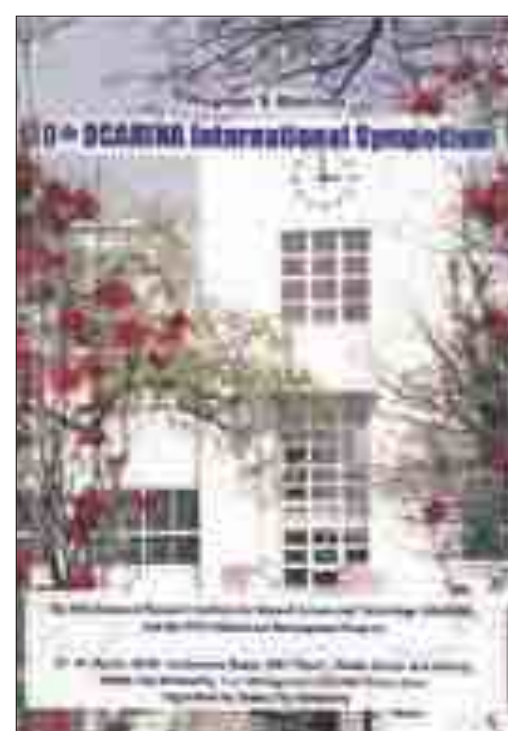
2020

3月

「第11回国際シンポジウム」☆¹⁸開催(予定)
大阪市立大学 学術情報総合センター 大会議室



☆16 2018年3月6-7日
「第9回国際シンポジウム」開催



☆17 2019年3月5-6日
「第10回国際シンポジウム」開催

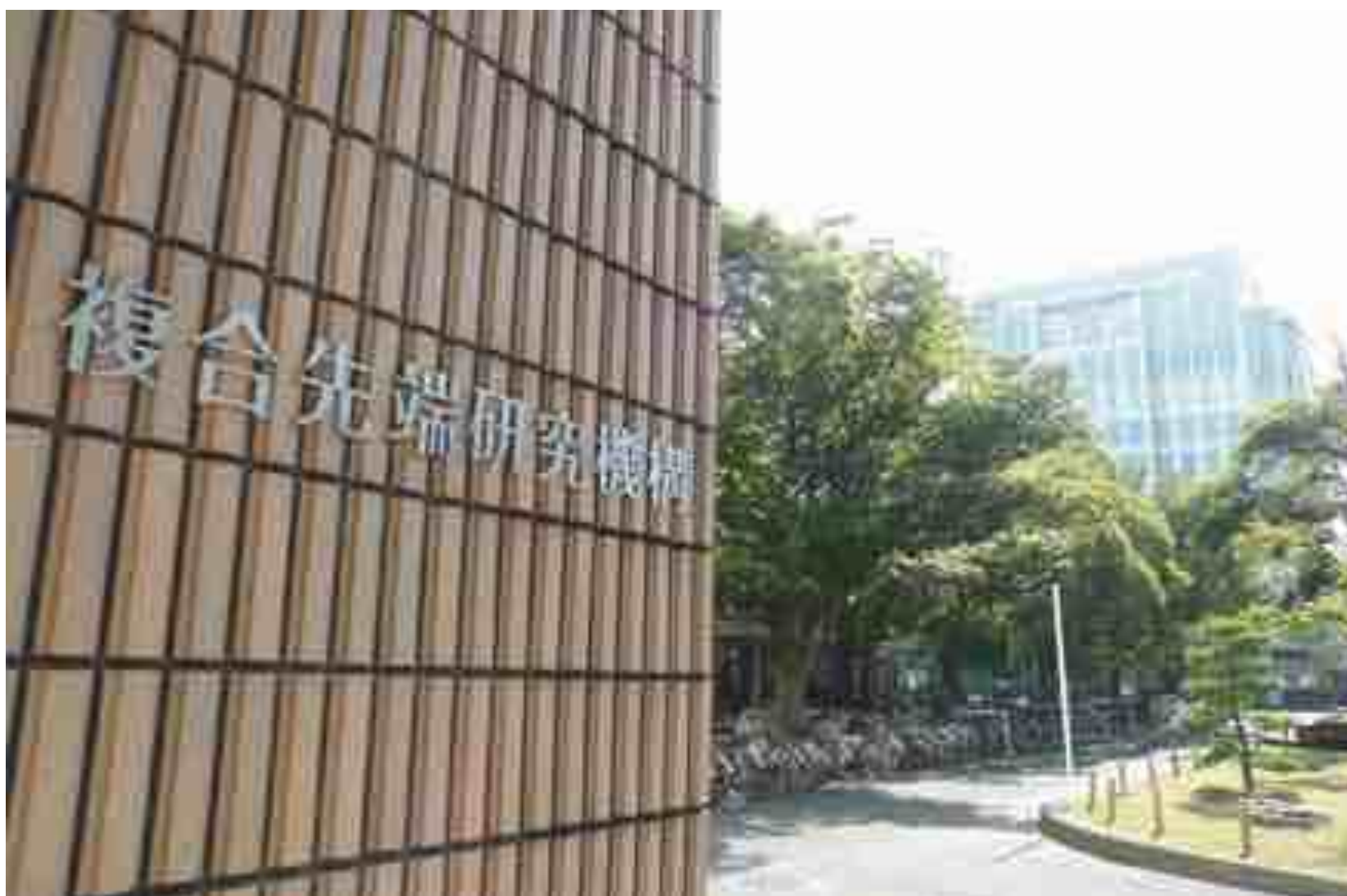


☆18 2020年3月9-10日開催予定であったが、
新型コロナウイルスへの対策により急遽延期

複合先端とは

複合先端研究機構（OCARINA）の使命は、地球規模のエネルギーと環境ならびに現代文明社会の持続性を探求する複合的・先端的な課題に挑戦し、都市型総合大学の研究科横断型の研究組織を構築し、異分野融合を推進することによって、新たな切り口から解決策を提示し、持続可能社会の構築に貢献することである。

大阪市立大学 複合先端研究機構（OCARINA）は、平成22年の設立以来、異分野融合とグローバル化の推進、また若手の育成と女性の登用を理念とし、着実に競争的資金を獲得し、大型プロジェクト研究を展開しています。現在では理学研究科、工学研究科、生活科学研究科、医学研究科の理系4研究科を母体として7つの大型プロジェクト研究を受け入れています。OCARINAの最大の特色は、少数精鋭ならではの高密度な異分野融合の実現にあり、医学に関わる連携研究を含めて、大都市大阪をベースにしたオンリーワンの研究を推進していきます。



複合先端研究機構は、今まで10余年続けて参りました体制を一新し、2020年4月より専任教員の所属しない組織として新たなスタートを切ることになりました。今後ともどうぞよろしく申し上げます。